

月は上りぬ あが

新井 宏

ウツを病む弟に代わり、荏原保険センターで簡単な手続きをしてから、久しぶりに武蔵小山の商店街を通つて、都立小山台高校のある武蔵小山駅まで歩いて見た。

相模原市の在来商店街のように、超大型スーパーや大型コンビニに押されて、次から次へとシャッターを降ろしているのに比べると、全長八百メートルのアーケード街は活気に満ちていた。東京でも最大級だそうで、弟の湿疹薬を買うためドラッグストアを探したが、たちまち五、六軒も見つかった。

初めてアーケードができたのは、私が小山台高校を卒業した年なので六十年ほど前になる。普段は電車を利用して通学していたが、時折、商店街を歩いて通つたので、かなり良く覚えていた。

確か、商店街の中ほどに映画館があり、「月は上りぬ」という映画を上映していたはずである。そうだ、今度の『まんじ』には、『月は上りぬ』を話題にして、我が高校生活を描いてみよう。歩きながら構想を練る。

都立小山台高校は、旧制の府立八中で、在校時は、日比谷高校に準ずる全国的な有名進学校であった。それが不思議なことに、日比谷高校と同じ学区内にあった。どう考えても、全国的な有力進学校が二つも同一学区に併存するのはおかしい。

実は、その理由を知ったのは、卒業してから大分経つた同期会の席上であった。

大森六中の出身者がいやに多いのである。洗足池の端にある大森六中が有名中学なのは知っていたが、恵まれた階層の住む地域とはそんなものかと思っていた。私の出身の荏原四中などは、日比谷高校を受験する者は皆無、地元の小山台高校受験でさえ各クラス一名がやっとという状態なのに大森六中は一桁多いのである。

理由は単純であった。大森六中には全国から越境入学者が殺到していたのである。そう言えば、友人の多くが地方出身者であったが、越境のことはどうも秘していたようである。高校進学近くになって、やっと八中とか小

山台の名を知ったほど事情に疎く、気づかなかつたらしい。その上、四百名ほどの入学者の内、二年生になる時には、七十名も進級させずに転校させて、その空席に優秀な転入生を迎えていたのだという。そう言えば、女子の定員は百名であったが、男子系高校のため、女子なら誰でも入学できた。しかし、名だたる進学校であり、授業について行くのが困難で、それが逆用されていたらしい。

ここまで書いた所に、青木昌彦の訃報が入った。肺気腫で、スタンフォード大からの帰国はかなわぬと知っていたが、またひとり友が逝った。

世界を代表する国際的な経済学者で、いつもノーベル経済学賞の候補にありがりながら結局は逸してしまった。

平成二年には五十二歳の若さで学士院賞を受賞しているが、それはノーベル賞が先になるとみつももないというので、急遽授けられたもの。もう一年、日本のパブルが続いていたなら、間違いなく受賞していたというのがもっぱらの噂である。

その青木昌彦も、高校二年生からの編入組であった。

クラスは八組ある中のA組で、出席番号は、青木が一番、私が二番と続き、座席も前後していたのですぐに親しくなった。彼は編入当初から英語が抜群で、総合成績でも常に学年トップ級、そのウシロに坐る私も、かなり刺激を受けて、数学と理科(物理、化学)、社会(日本史、

世界史)だけは青木に拮抗していた。だから、学年を通しての出席簿があった訳ではないが、その先頭A組の最初に並んだふたりが何かと目立つ存在であったのは確かであった。青木は西原衛生工業所の創業者の直系で鎌倉の鶴沼の豪邸から通っていた。

青木昌彦の著「私の履歴書・人生越境ゲーム」(日本経済新聞出版社)を読むと、湘南学園の中学時代には、平尾昌晃の隣に座っていたとか、半導体精密切断技術で世界に輝くデイスコの関家憲一とウマが合い生涯の友となつたとか、一年下で前衛的な作曲家・ピアノリストとなった高橋悠治からカフカのことや十二音階、はてはマルクスのことまで影響を受けたことなどが出ている。まさに自由で華麗な交友関係であった。その頃であろうか、滝井孝作の「無限抱擁」を読んで、父親に怒られたという。

しかし、「正規な」勉強をしない青木に危惧を抱いた母親が、アメリカ大使館に勤めていた友人を英語の家庭教師につけたので、英語の実力が急上昇した。

このように恵まれた中学時代も、県立湘南高校の受験直前に、盲腸炎が破裂して危篤状態となるハブニングに見舞われた。そのため内申書だけでも合格できるはずの湘南高校には入れず、もとの湘南学園の高校部に緊急避難することになった。その結果、二年生の時に小山台高校への編入学となつたのである。

小山台時代のことはあつさり書いてある。いわば進学のための予備校だったからであろうが、府立八中を受け継いだ先生の中に、数学や英語教育の本当のプロがいたことを賞賛している。後に米国で数理経済学者となるための英語と数学の基礎は全て小山台で得たと言う。交友関係の紹介では、まず私が写真入りで登場する。



青木昌彦 中西雄三
新井 宏

新井宏というすぐ後ろに坐っていた級友が、途中入学の時から親切にしてくれ、どちらかというところが苦手としていた理数の問題の考え方を伝授してくれた。彼は東京工大を出て技術者になったが、……役員を早めに退職して『理系の視点からみた「考古学」の論争点』（大和書房）という本を出し、考古学

の実証に一石を投じた。韓国の大学で教えたりもしている。……

……受験勉強は順調に進み、腕試しに新井と駿台予備校や東大の進学指導会の模擬試験に挑戦しているうちに、全国で十番くらいになった。

ふたたび模擬試験場巡りをしていたのは、どこかで「他流試合」の感覚であり、それが青春だったのかも知れない。模擬試験は浪人を対象に出題されるので、数学や物理・化学などは高校での履修を待たずに独習して、他流試合に臨んでいた。それにしても全国十番というのは優秀であった。

青木は「新井がいたので数学に進むのを諦めて経済に行った」などと良く言っていたが、彼の学問の基礎は「数理経済学」である。だから高校時代から数学の実力も冴えていた。数理経済学の基礎部分は、全て小山台高校の授業で十分にマスターできたと言うのは誇張ではない。

写真に出てくるもうひとりが中西雄三である。文中では野球のスラッガーとしての話ばかり出てくるが、実は青木がスタンフォード大学の分校を京都に作るに当たり、企業からの資金援助活動で多大な貢献をしたのが中西なのである。リサイクル事業で大成し、何かと面倒見の良い男であるが、それだけに公にし難いことでもあった

のかも知れない。三十年以上も、高校同期会の会長を引き受けてくれている。

そこに、妹の玲子から青木昌彦の訃報のことで電話が入った。まだ小学生だった妹と弟を連れて、松林の中に佇む鶴沼の家に行った時のことを良く覚えていてという。

青木の母や妹らから受けた接遇が、彼女にとって上流社会との初めての出会いであった。たしかムソルグスキの「展覧会の絵」が流れていた。

ところで青木昌彦といえば、数理経済学者である前に、全学連、特にブント(共産主義者同盟)の理論的な指導者としての姫岡玲治で有名であった。ブントの創立者である島成朗が「ブントはおれがつくったと思っていたけど、お前がつくったんだな」と青木に言ったという。それだけ、思想面で当時の学生運動に与えた姫岡玲治の影響は大きかった。

私の進んだ東京工大は、学生運動ではマイナーな存在であったが、姫岡玲治と高校の友人だと言うだけでも一日置かれたほどその世界では有名であった。

詩人で思想家の古本隆明が中央公論に「戦後世代の政治思想」という有名な論文を書いた時に、石原慎太郎、大江健三郎と共に取り上げたのが、無名だった姫岡玲治である。とにかく東大始まって以来の頭の切れる男として評判となったのは、彼が「姫岡の国家独占資本主義論」

とても言うべき論文を学部学生の時に書いていたからである。

ところで、文系の哲学者、詩人とはかり思われている古本隆明は、実は理系であり、私と同じく東京工大の新聞部に席をおいたことのある大先輩である。その古本隆明が姫岡玲治を世に出したが、まもなく姫岡玲治は死んで、青木昌彦として蘇った。

ところでここまで書いたので、青木の母のことにも触れておきたい。

珍しいことのように思うが、米国住まいの青木とは無関係に、何回かお会いしているのである。最初は、青木がやると昭和三十五年一月の「岸渡米阻止羽田事件」による米国入国禁止措置が解けて、ミネソタ大学に旅立った頃である。浅間山登山のため、友達と一緒に青木家の軽井沢別荘に泊めて頂いたことがある。青木の母がわざわざ付き合ってくれた。たまたまその翌日、浅間山の山頂近くで地震にあったが、それが昭和三十九年六月十六日の新潟大地震であった。

それから平成七年の十一月にも、鎌倉材木座の大きな邸宅に独居している青木の母を友人と共に訪れている。人に会うのは御用聞きとテレビ番組上だけだと嘆いていたが、頭脳は明晰で、帰りに村井康彦の「古京年代記」を頂戴した。

その後、大田区の久が原のホームに入っていたが、青

木の亡くなる二ヶ月前、百歳で逝った。

青木昌彦との青春も、私にとって大切な思い出であるが、『月は上りぬ』に戻りたい。

高校二年生の頃に見た昭和三十年の『月は上りぬ』は、私の奈良彷徨や歴史・考古学研究の原点となった思い出深い映画である。映画に関連して小論考を書いた記憶があり、どこかに仕舞ってあるはずなので、それを紹介しようと思ったが、どうしても見つからない。

それは大学一年生の頃だったと思う。最先端の統計学の「情報理論」に魅せられていた。物理学の基本法則エントロピーと、この「情報理論」の定義とが全く同じであり、そこに神秘性を感じていた。その小論考の中に『月は上りぬ』を小道具として利用していたのである。

『月は上りぬ』は、奈良に住む三姉妹、長女浅井千鶴（山根寿子）、次女浅井綾子（杉葉子）、三女浅井節子（北原三枝）が織りなす恋愛コメディであるが、背景の奈良がとてもすばらしかった。

三女節子のところに、恋人で長女千鶴の亡夫の弟・安井昌二から電報が届くが、電文は三七五五とだけある。それに対する節子の返電も六六六。万葉集の歌の番号、恋の歌であった。

卷一五の三七五五 中臣宅守

愛しと我が思ふ妹を山川を

中に隔りて安けくもなし

卷四の六六六

大伴坂上郎女

相見ぬは幾久さにもあらなくに

ここに我れは恋つつもあるか

とにかく新鮮であった。たった数字四文字に濃縮された愛の告白、それこそ情報理論の極致であった。限られた伝達手段に最大の情報量を込めること、すなわち単位当たりの情報量を極大化することが情報伝達の要諦であるなどと力んでいた頃である。今なら、さしずめ世界一短いラブレターとでもいうのであろうか。

三女節子が次姉の綾子と恋人の昌二の旧友雨宮渉（三島耕）を結びつけるために、勝手に企てた一月の上った夜のデートの場所は、東大寺二月堂だったように思うが、池があったので猿沢の池だったかも知れない。ついでに法隆寺や東大寺の各場面ももう一度見てみたい。

テレビでは、しばしば古い映画を放映しているので、ビデオやDVDなら簡単に見つかると思っただ。ところが、相模原図書館にもツタヤにも、いや国会図書館にも、まったく所蔵していないのである。どうやら、『月は上りぬ』はわずか一ヶ月の差で著作権五十年に該当せず、あと十年間ほど有効なため複製版がないらしい。東京国立近代

美術館の相模原フィルム保存センターに行けばあるはずだが、素人がこのこ出かけて行っても、見せてもらえないような代物でもなさそうだ。そこで、映画雑誌やインターネット上で情報を集めて見る。

監督は田中絹代、脚本は小津安二郎と斎藤良輔、配給は日活、公開は昭和三十年一月八日とある。

その頃、映画界には、監督、脚本、俳優を「貧乏ない、借りない、引き抜かない」という五社協定があった。後発の日活を閉め出すためのもので、石原裕次郎が『太陽の季節』や『狂った果実』で華やかにデビューする前の日活はそのため苦闘していた。

そもそも『月は上りぬ』は、昭和二十二年、松竹で小津安二郎監督が戦後第二作となる予定で書いた脚本である。ところが、主演の高峰秀子が、新東宝騒動の影響で松竹作品に出られなくなり、中止されてしまった。小津安二郎は、この脚本を七年後に女優田中絹代の監督第二作に譲ったのである。しかし、案の定というか、いざ製作が始まると各社と採めて難航した。この時、小津は徹底して田中絹代を応援し、筋を通す形で松竹を退社している。

小津安二郎の当初の脚本は、『晩春』や『麦秋』と同じく鎌倉を舞台としたものであったが、田中絹代はこれを奈良に変えた。同じ古都ではあるが、方葉集には奈良の

方が相應しい。

インターネットで調べてみると、たまたま『月は上りぬ』のロケ画面を集めた頁がある。

興福寺の五重塔、東大寺大仏殿の廻廊や八角燈籠、東大寺塔頭の龍松院、水門町、東大寺の戒壇院、南大門と地藏院、若草山、法隆寺の金堂や大講堂、西院伽藍前の道、旅館大黒屋附近、東大寺の二月堂、三月堂、東大寺の法華堂北門、奈良公園の雪消の沢などと、映画のシーン順に簡単な注釈入りで配列されている。

それらの写真を追いかけると、どうやら、節子らの企みで、綾子と雨宮が会った場面は二回あったらしい。最初は記憶にあった通りの二月堂で、節子と昌二が隠れて見守ったシーンなどもぼんやりと思い出す。

その二月堂は、もう二十年ほど前になるが、会社の出張を利用して、修二会、お水取りの達陀の行法を見るために、須弥壇前の二列目に陣取って一夜を過ごしたことがある。八人の練行衆が須弥壇の周りを回りながら、清めの水を撒き、印を結んで呪文を唱える密教的な秘儀であった。松本清張は、お水取りの行事はイラン伝統の井戸のカナートを連想させ、達陀の行法は、韃靼人のゾロアスター教の影響があるのではないかと『火の路』の中で述べている。そう思っただけで見れば、達陀の行法は、ポロデインのオペラ『イーゴリ公』の「韃靼人の踊り」とどこか通じている。

そして、節子と雨宮が二回目に会った場面が、十五夜の奈良公園の雪消の沢であろう。雪消の沢は、奈良公園内の飛火野と呼ばれるところにある小さな池で、万葉集にも詠われた場所だという。

ひとりよがりな回想に耽っていたが、「月は上りぬ」のことを取り上げたのは、もちろんそのストーリーを紹介するためではない。昭和三十年頃、みんなが同じ映画を見て、同じ青春を共有していた。ローマの休日、二十四の瞳、七人の侍、エデンの東、慕情、旅情、野菊の如き君なりき、ここに泉あり、理由なき反抗、と並べただけでも伝わるものがある。それこそ、万葉集の歌番を電報に載せただけで、愛を伝えることができたように、「ここに泉あり」を挙げるだけでも、青春が伝わる。

その頃、武蔵小山商店街には確か映画館が三軒あった。中学生の頃から生徒会新聞作りに夢中になっていて、小山台高校入学直後から新聞部の主力メンバーであった。全国高校新聞コンクールのようなものがあり、歴代上位に入賞していたため、活版印刷も商業新聞に極力近づけ、下三段は格好をつけて書籍や映画館の広告を載せていた。映画館を廻っては、広告原稿を出してもらったが、映画鑑賞券を協力してくれただけだったように思う。

そう言えば、模擬試験で「他流試合」をしていた頃、

試験の後に青木昌彦と一緒に、新装なったばかりの帝劇シネマで日伊合作の「蝶々夫人」のロードショウを見た。楚々とした八千草薫が実に堂々とアリア「ある晴れた日に」を歌っていた。もちろん吹き替えではあるが、それも懐かしい思い出となってしまった。

小山台高校の前身府立八中は、都心のエリート校の府立一中(日比谷高校)とは異なり、山手線の外側にある庶民的な学校であった。それだけに地域に支えられて成立していたので、戦前から校舎脇に二、三千坪の空き地を父兄会が運動場代わりに所有していた。

これを今から二十年ほど前に東京都が数十億円で購入してくれたのである。その頃、同窓会などには見向きもしなかつた連中が、やたらに会に出てくるようになった。

小山台高校の校舎の中心部分に、第八中学校に因んで八角塔があり、その直下に、小山台新聞部の部室があった。校舎の一等地を占有していたわけであるが、その横には大きな黒板があり、毎週「黒板新聞」を発行していた。新人部員は、ガリ版文字や少女丸文字のように、枠にはまった字体で、記事を清書させられた。

記事は、やはり教師の話題が多かったが、特に人気があったのは、教師の綽名の謂われである。黒猫、ロンドン乞食、オケラ、ギヤー伴、ギヤー沢、カルモチン、オ

ットセイ……。とにかく生徒間では、教師が正式な名称で呼ばれることなど全くなかった。

なかでも、担任であったオケラ(舞田正達先生)は、名物の漢文教師で、小身でありながら「白髪二千丈」式に、生徒が酒を飲んで騒いでも見て見ぬふりをしながら、抑えるところはピジッと抑えていた。九十歳で亡くなった時の偲ぶ会には、それこそ、官界、政界、学界、実業界、言論界からびっくりするほど多くの人士が集まった。

青木昌彦が、英語や数学教育のプロと賞賛したのが、ギヤール(大伴先生)やギヤール(井沢先生)で、とにかくうるさく厳しく怖かった。

ある時、宿題の準備が出来ていない友人がやって来て、なんとかギヤール沢の授業を遅らせろという。そんな時に、先生も困るような質問をするのが、私の役割であった。後の同期会の席上で、いつもギヤール沢先生から「あの頃の新井は怖かったぞ」とひやかされた。

ところで小山台高校の教師達は、学芸大学の先生に対して強い競争意識を持っていた。戦前の格付けでは、師範学校が中学校、高等師範が高等学校であった。ところが戦後学制で、高等師範が教育大学になったのは良いとして、師範学校がみんな学芸大学に昇格してしまったのに、府立中学は普通の新制高等学校に留まっていた。

八中の教師達の意識としては、師範学校よりも格上と

思っていたので、これが学校運営の面で、天下りの校長との摩擦を生じていた。

面白いことに、当時の小山台高校は、あたかも大学のように、科目の単位制と選択制を採っていた。だから、ひとつの授業が終わると、次は生物とか古文とか音楽とか、生徒の方がぞろぞろと教室を移動するのである。したがって、原理的には授業の空白帯があってもおかしくなく、図書館には授業の真つ盛りの時間帯でも、結構生徒がいた。

そればかりではない。校内の片隅には小さな食堂があり、授業時間中でもいつも生徒が入っていた。

このような校風は、おそらく、八中を大学に擬することから背伸びしてはじまったのではないかと思うが、映画監督の山田洋次、ジャーナリストの筑紫哲也、異色検事の河上和雄らを生んだ風土になっていたのであろう。あるいは菅直人もそんな流れであろうか。

最近、都立高校としては珍しく、春の選抜で甲子園出場を果たしている。そう言えば、中西雄三のいた頃の小山台高校も野球が強かった。そんな歴史があつてか、甲子園出場を支援するための募金では、信じがたいほどの大金が集まった。

了